

進侍醫叙法眼

〔先民傳醫術〕吉田安齋字鉅豐號自休半田順庵之弟子也順庵蓋本邑產自幼篤志瘡醫受業于澤野忠庵之門慶元之間遠入阿媽港潤色其技歸朝之後名聲大震安齋壯歲卽師事半田氏折肱斯道盡得蘊奧兼讀軒岐之書與所傳者審同辨異遂成一家之學延請者無虛日其回生起死不可枚舉元祿甲戌終于家

〔蘭學事始上〕一又栗崎流上といへるは南蠻人の種子なりとこれは南蠻邪宗の徒嚴禁となり其船の渡海も御禁制となりたれども以前は平戸長崎の地に彼人々雜居し妻を持ち子も有りしが後々これをも吟味有て蠻人の種子の分は殘らず此地を放流せられしが其中栗崎氏にて名はドウと云ふものは彼地に成長しても其宗には入らず其國の醫事を學びしが邪宗に入らざる譯を以て歸朝を許され召歸され長崎へ歸りし後其術を以て大に行れ至て上手なりしが人々栗崎流と稱せしよし名のドウと云るは蠻語露の事なるよし後に文字を填めて道有と認めしとぞ今の官醫栗崎君の祖なるや又別家の栗崎なるや詳なる事は知らざるなり吉田流中檜林流中など云るは阿蘭陀通詞にて彼方法を學び一門戸を開きしなり略○下

〔先民傳醫術〕栗崎正元其先食土栗崎地在肥後父道喜生七歲與乳母避仇于崎居二年讐覓之急矣乳母遣喜竊乘番船遠走呂宋年十四留意於外科之術努力八年輒精其業後思東歸登賈船抵長崎以良工見稱于國仍姓栗崎氏正元幼而雋悟長益精研道喜年已七十口授以瘍醫要訣正元乃取平日所聞于父者集錄貽之子孫正元術益熟名益著求療者輻輳于門存濟甚多慶安四年卒子正家亦有名

○中

檜林中豐重善通蕃語年甫十八官舉爲荷蘭館小譯乃寬文五年也居二十一年貞享乙丑累擢大譯爲入温順多能頗精外科術蓋從荷蘭之精斯術者傳焉元祿戊寅年五十一移病辭職稱號榮久以濟世